

Title	大学紀要自然科学編50号に寄せて：未来への希望を託して
Sub Title	
Author	秋山, 豊子(Akiyama, Toyoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of the natural science). No.50 (2011. 9) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	50号記念号 巻頭言
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20110930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巻頭言

大学紀要自然科学編50号に寄せて——未来への希望を託して——

「50号発刊」に際して、その発刊を祝い、自然科学の面からこの25年間で振り返ろうと用意していたが、さる3月11日に日本は一変した。その午後2時46分、宮城県沖に未曾有のマグニチュード9.0という大地震が発生し、東北・関東の広い太平洋岸へ10-20mもの想定をはるかに超える大津波が押し寄せ、壊滅的な打撃を受けて瓦礫の山と化した。さらに追い打ちをかけるように地震と津波による福島第一原発の事故が起きた。既に死者は1万4,000人を超え、行方不明者も同数近くあり（2011.8.25現在；死亡：15,735人、行方不明：4,467人）、住む場所を失った15万もの人々が不自由な避難所暮らしを強いられている。原発事故は最悪の事態を避けるべく懸命な復旧作業が続けられているが、既に高濃度の放射性物質が原子炉内部から空中や海水へ漏出し、事故の規模は、チェルノブイリ原発事故と同じレベル7と認定された。近隣住民には避難勧告が出され、困難な復旧作業が日夜続けられ、日本人の総力戦のような緊迫した状態が続いている。

日吉での地震の揺れも、未経験の強さであったものの、建物や人に甚大な被害はなく幸いであった。しかし、その後の停電と電車の運休により、学事日程中ではなかったものの、多くの教職員・学生が「帰宅難民」となり大学内で一夜を明かした。以後、卒業式・大学院の学位記授与式は中止され、多数が集まる大学の集会・シンポジウムも中止、日吉地区では一日3時間程度の計画停電が実施され、入学式も延期となり、日吉の学事日程は繰り延べて4月18日から学部ガイダンスという異例の措置となった。

思えば、この紀要50号を発刊するまでの25年間、日本は阪神淡路の大震災はあったものの、それも早期に克服し、安定した経済力、信頼できる製品を生産・輸出する科学技術の国として高く評価されてきたと思う。このように国難ともいえるべき日本の危機が訪れようとはだれも予想しなかったろう。今、この危機に直面してその問題の基盤を考えると、「地震や津波の予想と対策」、「原子力発電とその他のエネルギーの問題」、「放射能の生態系・生物への影響」などであり、これらはまぎれもなく自然科学分野のテーマである。一面瓦礫となった集落跡に立つ被災者に、自然科学の研究者としてすぐ力になれることは何もないに等しいが、未来に向かって希望を持って復旧・復興しようとするとき、自然科学の研究はいつか、何かの助けとなると信じていたい。

この自然科学編については、初期長らく磯野直秀先生が編集代表者として投稿規定や編集方法など細部の整備に大きく貢献された。その磯野先生が本号で少し紹介されているが、この自然科学編は原稿不足で悩むこともあまりなく、この25年間に年間2号のペースで、多くの貴重

な原著論文・研究ノート・資料などの報文が刊行され、平成16年からインターネットで読めるON LINE版も発信された。大学紀要としてその役割をしっかりと果たしているといえよう。これまでの多くの投稿者の皆様に、この場を借りて御礼を申し上げたい。

日吉キャンパスでは、計画停電は解消されたものの、余震はなお続き、電力供給不足から節電下の授業が求められている。壊滅的な状態で研究どころではない大学も多い中、つくづく、自然科学の研究が進められる事を感謝しつつ、その発達が現在の日本の窮地に役立つことが出来るよう、本編の刊行が未来への希望につながることが出来るよう、衷心から祈るものである。

2011年4月18日

日吉紀要刊行委員会 委員長 秋山豊子 (生物学)